第28期社会教育委員の会議

第11回定例会

令和２年２月20日

【１】　開催日時

令和２年２月２０日（木）１８時００分～１９時００分

【２】　開催場所

世田谷区役所第２庁舎３階　教育委員会室

【３】　出席委員

萩原委員（議長）、坂倉委員（副議長）峯岸委員、神保委員

森岡委員、村上委員、権田委員、山崎委員、吉岡委員、湯澤委員

【４】　出席職員

教育委員会事務局

皆川生涯学習部長、田村生涯学習・地域学校連携課長

大井社会教育係課長補佐、御園生社会教育担当係長、橋本社会教育係主任

【５】　傍聴人

無し

【６】　次第

１　議事

（１）第２８期社会教育委員の会議活動報告書のまとめについて

（２）その他

２　その他

○議長　では、定刻になりましたので、第11回定例会を開催したいと思います。本日が第28期定例会の最終回となります。本日、傍聴人はいますか。

○事務局　いらっしゃいません。

○議長　議事録の承認ですが、本来でしたら前回の議事録の承認をいただくところですが、今回の会議に間に合わないということで、後日でき上がり次第、各委員の皆様には御確認をよろしくお願いいたします。

○議長　では、次第に従いまして、本日の議事に入ります。第28期社会教育委員の会議活動報告書のまとめになります。もうここまで議論は尽くしてきたと思いますので、抜本的な修正ではなくて、若干の修正点がありましたらということになろうかと思います。

まずは前回の会議から幾つか修正があったと思いますので、事務局から変更点を説明していただきたいと思います。

○事務局　お手元の会議資料１、今期の報告書を見ていただきたいと思います。

まず、開いていただいて１ページ、「はじめに」のところです。２行目から３行目ですけれども、「生きづらさを感じず前向きに生きていくための環境のあり方」が、後のページと区切り方が違うということで、「環境のあり方」までかぎ括弧を持ってくるという形で統一をさせていただきます。

それから、上から４行目、「『共の世界』を育むプラットフォームをつくる」の「プラットフォーム」が「プラットフォーラム」になっていたのを修正させていただきました。

それから、真ん中の段に行きまして、「公開ワークショップでは」から３行目、「同士がつながり合う」の「合う」、もう１行下の「合う」も漢字になりますので、修正させていただきました。

次に、２ページ、上から２行目の終わり、こちらも先ほど言った「生きていくための環境のあり方」のところにかぎ括弧、その下の「プラットフォーム」も修正をさせていただいています。

あと、23ページ、○が４つございますが、上から３つ目の「メディアリテラシー」が「メディアテラシー」となっていたのを修正させていただきました。

それから、26ページの「(2)子どもの困難に」のところで「(2)」と「子ども」の間が１文字分あいていたのを、ほかと合わせて１文字詰めております。

同じく27ページの「(3)私たちが」のところで「(3)」と「私たちが」の間が１文字あいていたのを詰めて修正させていただきました。

○議長　ありがとうございます。

　では、各委員から何か修正点や気になる箇所等がございましたら御意見を伺いたいと思います。

○委員　私ごとですが、46ページの名簿のところで「世田谷ユースキッチンｉｎ松沢代表」となっているのですが、「世田谷はぐくみプロジェクト代表」でお願いできたらと思います。

○事務局　承知しました。

○議長　46ページの皆様のお名前、所属等、大丈夫でしょうか。

○議長　いつも資料編と本文の間に「おわりに」を持ってきていましたか。

○事務局　はい。第27期も。

○議長　わかりました。

　私からは、33ページの「おわりに」の最後の３行に「来期の委員会では、区の社会教育主事・社会教育指導員の業務実態が検証され、本来あるべき社会教育が機能するよう、実効性のある提言がなされることを期待したい」と入れました。これは、今期でいろいろとコーディネーターとしての社会教育職員の重要性が議論をしていく中でクローズアップされて、やはり29ページからの「－提言－　第三の大人・若者の発掘とネットワークづくりに向けた仕組み」を本当に現実化させるためには、誰が動くのか、誰が主体になって動かなければいけないのか、仕掛けになっていかなければいけないのか、もちろん、これは区民ですが、では行政として何ができるかといったら、行政の専門職としては社会教育主事、社会教育指導員がおりますので、そういった方たちが区民とともに協働しながらこういう動き方していかないと、これは絵に描いた餅になってしまうということで、「おわりに」にその一文をつけさせていただきました。

　今期の報告書はフォントがとても見やすいです。見出しとか、今までの報告書で一番見やすいという印象です。

　これが完成した暁にはどういった方面にこの報告書は配られますか。

○事務局　まずは教育委員、教育委員会に提出をさせていただく。それから関連している子ども・若者部も幾つか関連した所管がありますので、参考資料という形でお配りをさせていただきます。

○議長　皆さんからこういうところに配ってほしいというのはありますか。やはり広く目にとまってくれなければ意味がないと思います。

○事務局　あえて申し上げますけれども、全社会教育主事、全社会教育指導員には配付します。

○委員　議会には行かないのですか。

○事務局　はい。

○委員　福祉分野も行かないのですか。

○議長　かかわってきますよね。

○事務局　平成30年度に生活実態調査をした所管は子ども・若者部に入っていますので、そういうところには当然ながら情報提供はさせていただきます。

○委員　ただ、これが部署に来たときに、それに全部目を通したとしても、では何をするかというところにはなかなかいかないと思うので、こちらからの発信として、これを実現させるためにどうしたらいいでしょうと、そこまで投げかけていただきたい。やはりいろいろな部署の方から、こうしたらいいという声を上げてもらって、実現できるように運んでいただければありがたいかなと。あとは学校運営委員とか、現場で動いている人たちにも何かの形で目にとまるようなことがあると、もしかしたら保護者たちはこういうのをやりたい人もいるので、動いてくれるかもしれないなと思います。

○議長　配付して渡しただけでは多分人は読まない。ただ、それに説明、概要版をつけていただくとか、一目で、その骨格がわかるようにして、それを各委員の皆様にも伝える。昨年の生活実態調査では10人に１人というかなり衝撃的な数字だと思います。全国は７人に１人とはいえ、世田谷区で10人に１人という割合の高さが大きかったと思います。関心も大きかったですし。私も成城ホールでの報告会を見に行きましたけれども、本当に区民の方々が満席になるぐらいいらっしゃいました。ですから、やっぱり子ども・若者部が中心になりながらも、これはそれと一緒にやらないと意味がなくなってしまうと思います。行政内部もそうですし、行政と連携をとって動いてくださっている地域、区民に届けていかなければと思います。あとＰＴＡもそうですよね。親御さんに身近な話ですから。

○委員　私も本当に勉強不足で、社会教育委員の会議というものがどういうものか現役のときには全然存じ上げておりませんでしたので、今回のものは、例えば単Ｐの研修会、家庭教育学級の話題にするとか、そういう形で実現しなくても、多くの保護者の人たち、地域の方の目にとまって、こういうことをやっているということをもっと知ってもらいたいと思います。

○議長　実はそこにアンテナを立てていたという人もいらっしゃると思います。貧困のワ

ークショップをしたときにも、自らそれにひっかかってこられた。それは自分のライフワークや、関心、実際に私は身近な子どもや家庭をサポートしていますとか、そういった方もいらっしゃっていました。そうしてなるべく広範に周知することによって、第三の大人の方々がひっかかってくる可能性は出てくるのではないでしょうか。

また、29ページからの提言ですけれども、(1)方策の柱１、(2)方策の柱２というふうに大きく見出しがついています。さらに、(1)方策の柱１に対して方策案①「学校カフェや地域サロンの開催」、方策案②「講演会・養成講座・ワークショップの開催」となっております。そして31ページ、(2)方策の柱２には、方策案①「ネットでつながる学習支援」ということで、今回、我々の具体的な方策案は３つ出ました。これを目次に出したほうがいい。最初に皆さんが読むときには、まず目次をぱっと見ると思います。(1)方策の柱１の下に方策案①、方策案②、そして(2)方策の柱２、方策案①と具体的な方策案までこの目次に入れるのはどうでしょうか。そのほうがどういう具体案を出したかというのが目にとまりやすい。概要版をつくっていただくのが大変ということならば、目次のところだけコピーをとって、こういう中身ですでもいいと思います。それでわかるようにするためにも３つの方策案を目次に入れる。

○事務局　そうしますと、目次の２の提言の(1)にも方策案①、②、(2)の下にも方策案①を入れさせていただく。例えば(1)方策の柱１第三の大人・若者の発掘と顔の見えるネットワークづくり、方策案①「学校カフェや地域サロンの開催」と記載をさせていただくということでよろしいでしょうか。

○議長　いかがでしょうか。よろしいですか。

（　異議なし　）

○議長　ほかはいかがでしょうか。特にないようでしたら、これで最終報告書とするということで、案を取るという形でよろしいでしょうか。

（　異議なし　）

○議長　では、これをもちまして、この報告書が確定いたしましたので、どうぞよろしくお願いいたします。

では、議事のその他に移りたいと思います。

２期、３期にまたがってかかわってくださった委員の方々にとっては、このテーマでは足かけ４年ということになろうかと思います。また、今期委員になられた方々は、この２年間でこういう形になりました。皆様から改めて今期を振り返って、あるいは任期がまた

がっている方には４年間、６年間も含めてになるかと思いますが、御感想、御意見をいただければと思っています。まずは委員からよろしいでしょうか。

○委員　参加させていただいたときには、33ページに書いているように、そもそも世田谷に貧困があるのかから疑問が始まっての参加になったわけですけれども、２年間、ここでいろんなことを考えさせていただいて、今の自分の職業につながるところがすごくあると感じています。地域と連携した学校のあり方、地域に開かれた教育課程等、４月から始まる学習指導要領を考えた時に、これは子ども自身も考えて、今度は逆に地域をどんなまちにしたいかという提案をさせようかというのを漠然とですけれども、今思っています。なので、子どものことを中心に話題になっていたことはすごくありがたかったと思います。ぜひ実現に向けて何かできることがあればと思っています。

○委員　最初、貧困というテーマがとても難しく、関係性の貧困ということだったので、つながりが薄い子というのは地域で見ていてもいてその子をどうしていくのか。そこを念頭に置いて会議に出させていただきましたが、青少年委員は個人的に見るのではなく、全体的な活動のつながりというところで、個々で困っている人たちというのは、どっちかというと、民生委員、主任児童委員のつながりになるのかなというところで、見えているようで見えなかったり、そういう薄い気づきというのをどういうふうに地域とか学校に戻せるのかという課題を提供していただいたのかと思っております。

やはり地域で子どもたちを見ていく時に、地域の人が幾らかかわったかで子どもの成長、深みは出てくるのかなということで、地域に出てきたらなるべくいろんな世代の人とつながるというのはすごく大事だと思っておりますので、いろんな施策が実現していけばいいと思いました。

○委員　私は、子ども食堂、地域活動、そういう実践の中でのことで、会議に出てどんなことをされているのかわからない中、初めの数回は過ごさせていただきました。

テーマとしては、今、実践している子ども食堂でつぶさに見ている子どもの様子だったり、実例的にはありますが、では、その先にどういうことがあるのか、地域とつながっていったらいいのか、現場の人たちは意外と横のつながりを望んでいなかったりとかということの中でどのようにまとめていくのか。進んでいく中で、提言に至っては自分でもかなり勉強させていただいて、とても勉強になりました。

また、大人だけではなくて、子どもの声、本当に子どもは何を望んでいるのか、大人が思っていることともっと違う視点や、感覚もあるので、そういったことも含めてより深ま

っていけばいいと思います。

あとは、実際に私もやってみたいと思っているテーマがたくさんあるので、小さな形でも、またこのメンバーでもいいので、やっていかれたらなと思っています。

○委員　問題はかなり複雑なところで、いろんなところから関係しているので、社会教育というアプローチの中でどういうふうに捉えていくか、最初、戸惑いがありました。社会教育と子どもの問題は、いろんな方面から問題が多いと思いますが、それをどうマッチングさせていくかというのが私の中で１つの課題としてあると思っています。

先ほどお伺いしたこの報告書がどこに行くかという問題で、子ども方面の部署に行くのは当然だと思いますが、本来は保健福祉とか、いろんなところに行かなければいけないものだと思います。議会でも子どもの問題はいろんなところで出てきています。それこそ教育の問題だけではなく、保健福祉、子ども・若者部、いろんな方面からもっと捉えていかなければいけない問題がいっぱいあると思います。そういう意味では、行政としては縦横の関係でもう少し深くやっていかなければいけない問題がかなり含まれているというのが正直な感想でございます。

○委員　私も最初は、世田谷区で貧困？と思っていましたが、やはり関係性の貧困というのは、いろんなところにあるというのが今回見えてきました。

ワークショップを開催していただいたことで、参加してくださった方からいろんなお声を聞けたかなと思いますので、やはりいつも同じ人たちの話だけでなく、広く直接声が聞ける場を設けていただいたことに感謝いたします。

そしてまた、今後、小さくてもいいので、どこかで１つこういうものが事例としてできていくと、それならできるという人が必ずいると思うし、そこからまた広がってつながっていくようになっていったらいいなと思っています。

○委員　よく地域と連携と言ったりしますが、どういう活動をしていて、どことどうつながればいいのかというのを知らない教員もいます。ただ、どうしても中学校は３年間しかなくて、不登校の子が押し出されるような形で卒業する。そうなると、その後のことを考えたときに、学校だけで解決できない事案が少なからずある。私がこの委員を通してやってきたのは、教員の意識として、学校だけで解決することができない場面に、学校だけではなくて、広くいろんなところとつながる、つなげることで、３年間で終わるということではなく、場合によっては長く、10年、20年かかるかもしれないけれども、必ずつながりを持っていないと、子どもも保護者も不安に思うということで、関係性をテーマにしてい

ただいたので、そういう部分では、私自身もそうですし、教員の中にもそういう考え方、つなげられる部分を探してみると、本当にたくさんあります。そういうところをつなげられるということを広められたのが非常にいい経験だったと思っています。

○委員　今まで地域で子どもたちのことでいろいろ携わってきていましたけれども、そこまで自分の中で捉えていなかった部分がありましたので、自分の未熟な知識の中で何かいい方法はないかと、もう１度地域でのあり方を考え直させていただけたと思っています。ただ、それについて解決ができているものではないという大変複雑なものだと思いますので、これはこれからも中長期的に議論が続くものであると思います。結局は居場所ということになると思いますし、それも多様な人が多様に出会えて、それが重層的に重なってというような、１つや２つで解決できるものではないので、その工夫やアイデアがもっと必要だと思いますし、これから地域に戻ってまたかかわるときにもそういうことを頭に入れて忘れないようにしながら、自分も何かできることが少しでもあったらと思いました。

あと、本当に困っている子ども、保護者の方々に何か届くものがあったらいいなと、それは願わずにはいられません。少しでも届くためにもやめないで続けていかなければいけないと思うので、多くの人がそういう気持ちでかかわってくれたら、何か見つかっていくのではないかと思いましたので、こういう議論や、ワークショップとか、いろんな試みがこれからも続いて多くの方に知っていただいて、一緒に考えていっていただけたらいいのではないかと思いました。

○委員　僕が最初に委員になった時のテーマは、たしか若者の居場所というテーマだったと思います。その若者の定義も、20歳そこそこくらいだと思ったら、39歳ぐらいの年齢層まで若者として捉えて、居場所をどうするのかという話で、これはすごく重いテーマだということが最初に委員をやったときの印象でした。その後、それが関係性の貧困につながっていき、今にもまだ続いている。

今回、特に提言の中で印象に残ったのが、本来あるべき社会教育が機能するよう、実効性のある提言がなされることを期待したいという思いです。やはり最後のよりどころは行政という思いがずっと強くありました。

例えば子ども食堂をやるにしても、地域で好きな人だけが集まってやるということではなく、区の施設を使ったりする以上は、区がどれぐらい主体的にかかわってくれるのかもどかしい部分はありました。僕は地元の児童館にかかわっていて、児童館の職員がすごく熱心で、私は結局６年分の社会教育委員の資料がたまっていたのですが、児童館に持って

いき、もう終わったから見ていいよと言うと、見て、「社会教育委員はこんなことやっているのですね」と。また持っていくと、「この前の会議のことで聞きたいことがある」と言ってくれる。児童館で子どもにかかわっているといろんなことが見えてきて、でも自分たちだけではどうしようもできない。勉強したいけれども情報も入ってこない。その中で、たまたま今こういうことをやっていると言うと、「こういうことが必要ですか」と言います。例えば子ども食堂の話をよくしますけれども、「すごく励みになります」、「もっと一生懸命やります」とおっしゃってくれます。

区の職員、区の専門部署ももっと積極的にかかわっていければ、まだまだ我々も何かやりたいなという思いは絶えず持ってやっているので、リーダーシップを発揮できるものがあれば、今後いろんなことにつながっていくのかなという期待はしています。

○副議長　４年間お世話になりました。４年を振り返ってここでの議論がどれぐらい社会をよくしてきたのかということを考えると、余り明るい見通しができた感じはしないし、そういう意味で言うと、若干無力感を感じていたりしますが、では意味がなかったかというと、そうでもなく、この委員会でということではないですが、例えばおやまちプロジェクトは約３年の中でいろんな動きがありました。商店街の夕方の時間が小学生の放課後の居場所になっているし、その中で始まった子ども食堂、カレー食堂と言っていますけれども、毎月やっています。尾山台小学校はずっと一緒にやっていて、３月もワークショップをやりますが、尾山台中学校もどんどん開いてきて、会議室を開放するから何でもやってくださいみたいなことや、部活を一緒につくろうということもあって、そういった意味で言うと、４年間どんどん悪くなるばかりかというと、身の回りは小さく、これまでにない動きが出てきていると思いながら、皆さんのお話を聞いていました。

こういう仕事をしていると、いろんな組織から中期的な組織の評価委員をやってください、計画づくりをやってください、ワークショップをするのにどうやったらいいかというような相談を受けます。前までは、相談されて、一般的にはこうですという話をして、終わっていました。何かが大きく変わるわけではなく、専門家に聞いたからいいでしょうという委員会があったりして、それに何の意味があるのだろうとずっと思っていて、そもそもこの会議は何でやっているのですかと言うと、本当に二、三年前は、「いや、本当におっしゃるとおりです。でもね」みたいな話で終わって、そこから先に行かない。だけれども、この２年ぐらい潮目が変わっているのを感じて、全ての組織ではないですけれども、そもそも何でこれをやっているのかと話をすると、「そうですよね。私もそう思います。どうす

ればいいですか」という話になって、では、こういうことやったらどうですかと小さくても次の一歩が始まるみたいなことが世田谷でもあって、例えば社会福祉協議会の計画、野毛町の公園をつくるのに、これまでのあり方と変えてワークショップをやっていこうとか、少しずつ動き始めています。

多分私が尾山台で直面していることも、どうせこれまでと同じやり方をしてもこれまでと同じことしか起こらないから変えなければいけないということと、個人の意識だけではなく、ステークホルダー間の関係も変わります。小学校と大学が一緒に何かをやろうとすると、それだけでできることが違うし、子ども食堂をやろうという人と、保育園とか、今、パイ焼き茶房という喫茶店でやっていますが、その人たちが使うことによって、なぜかそこに訪問診療専門のクリニックの事務のおじさんがカレーをつくるのを手伝いに来て、すごく生き生きとしていたり、地元の農家さんが持ってきてくれる野菜でつくっているみたいなことが起こっています。

最初は暗い話をしましたが、よく考えてみると、これまでに全然なかった動きというのがそこかしこで動いていて、そこに行けるかどうかは、関係性の貧困に陥っている、貧困だと言われている人の問題ではなくて、それを考えている私たち自身の関係性の貧困。どうしてもどんどん縦割りになっていて、分断されているから、そこここではいいことを話されているけれども、結局我々の関係性が貧困だからそれが増幅していかないということがきっとあるだろうなと。だけれども、それはすぐ変わると思います。すぐマインドセットが変われば変わるし、やり方を変えれば変わるし、そういう個人レベルの変化と組織同士のつながり方が変われば、その上のマクロレベルの制度の問題もすぐ変わっていくはずなので、今どうしたものかと思っているのは、何年かたったらどんどん動きが出てくるのではないかと感じています。

委員の皆さん方は濃密な充実した現場をお持ちだと思いますが、願わくは、ここで議論したことが広報の問題というよりも、個々の現場でやっていることを共鳴させていき、いろんな思いを持っている人が同時につながっていくような、現場のやっていること、１人１人の思いを増幅して共振させていくように位置づけが直されていくと、もっとここでの議論が実社会に浸透していくのではないかということを思いながら聞いていました。

なので、私としては、この４年間で何かがなし遂げられたような感じは余りしないけれども、きっとこの先に向けてすごく身になっていく時間になったと思います。

○議長　私は４期８年間になります。これが本当に最後になりますが、私がかかわり始め

た１年目というのは、主に中学生が地域にどうかかわるか、中学生の地域参加というのがテーマでした。でも、そのテーマをやっていくときに、やはり中学生の学校外の居場所がない、活動の拠点が必要だという議論が出て、それと同時に、中高年も居場所が足りない、地域とは何だろうという話になりました。地域と言うけれども、そもそも実態として目に見えてかかわり合いが、顔の見えるつながりというものが今の都市化した世田谷区の中で実感レベルであるだろうかという話が委員から、また、シンポジウムの参加者からも出てきました。

その次の期では、世田谷区では人口の移動が激しく、世田谷区にも新たに外から来て住み始めた特に子育て世代の保護者は、どうしたら地域にかかわっていけるだろうか。地域のお祭りにしても、自治会活動にしても取っかかりがないという話になりました。地域をつくるために大人がそもそもつながっていなかったら、子どもたちがつながれる場所がないではないかと。幾ら地域とつながるといってもその実態が危ういというところに行き着いて、それで今度は大人がどうつながるかというテーマで議論をしました。それは、あくまで子どもたちの地域参加のためにもっと手前から始めなければいけないという話です。根本的にもっと手前の地域づくり、子どもたちも若者たちも育つような地域づくりというような軸にシフトしました。

例えば新しく町会に入るにしても全然わからない状況なので、町会の方にも新しく住み始めた方たちに向けてわかりやすいパンフレットを配ったらどうでしょうとか、区のホームページもいろんな情報があちこちに散乱していて、特に社会教育の子ども関係というのが、実はいろんなところで講座や活動があって、ホームページを見ても散らばっています。だから、それを一元化したらどうか、ワンストップでつながれるようにできないか、そういう具体案が大分出されました。その期の問題関心は、今期、また前期にも続いていく関係性の貧困でした。このテーマはもう８年前から見え隠れしていて、それを掘り下げていけばいくほどその核心は関係性の貧困というところに行き着いた。それは、まずは大人の貧困があって、世代間でも子育て世代の親御さんからシニアの世代まで循環しているか、小さな子どもからお年寄りまで循環的にかかわり合っているコミュニティがあるかという視点で地域社会を見たとき、そういうライフサイクルというのが崩れているのは明らかで、そういう前提のもとで出てきたのが子どもの貧困でした。

いよいよ本丸まで来て、ではどういう方策をといったときには委員の皆様からもいろいろと指摘がありました。余りにもこれは複雑多様に絡み合ってしまっているものだし、時

間をかけてこういうふうに変化してしまっているので、特効薬はない。地道に小さな場所から顔の見える関係をつくっていくということ以外に方法はない。何か大々的にイベントをやったからみんながつながるかというと、そんなことはないわけで、いきなり相談窓口みたいなものをつくればＳＯＳを出してくれるかというと、そんなことはない。やはり普段の近所づき合いや、インフォーマルなかかわりのコミュニケーションの中でお茶飲み話ができる、気軽に話ができる関係の中で「実は…」という話が出てくるわけで、そうなってくると、実は小さな場で具体的な他者とかかわることが大事。小さな一歩かもしれないけれども、とても本質的なことではないかと私は思っています。

逆に言うと、そのほうが実感が違うと思います。手応えが目の前であるというか、お互いにかかわり合っているので、外から見るとそんなの小さいと思えるかもしれないですけれども。例えばサークル活動にしても、やっている方たちはすごく効力感がある。社会教育は、そういう小さなサークル活動を行政的に支援していく仕事なので、そういう方たちのネットワークが重層多様につながり合って、それが生きた地域になっていくと思います。なので、そういうビジョンは私の中では全然ぶれていないのかなと。ただ、それを誰がどうやって、どこからですよね。そのためにはやはり行政の力をかりざるを得ないし、そのための専門職として社会教育主事、社会教育指導員が法的な根拠を持っています。なので、そこはやはり期待したいですし、ただ、一方で、区民はひな鳥みたいになっていればいいかというと、そうではないはずです。人間誰しも自発性というのがあるわけで、自発的な気持ちができる限り喚起されるような環境づくりというのが社会教育の大事なところです。引っ張っていくのではない。サポートはするけれども、ノーコントロールです。そこがなかなかわかりにくいところです。

私は、大学院時代に戦中戦後の社会教育の中堅リーダーを育てていた下村湖人を研究していました。その方は全国の青年団の地域の中堅リーダーを養成していた人です。その人の思想をずっと追っていた中で見えてきたのが、彼は、地域のつながりというのは煙のようなものだと言います。だから煙仲間という言葉をつくった。彼の言った中で印象に残っているのは、「白鳥蘆花に入る」という言葉です。白鳥が真っ白いアシの花の咲いた野原に舞いおりる。社会教育というのはそういうものだと彼は言いますが、その白鳥が真っ白なアシの野原に舞いおりたときに、白鳥はどこにいるかわからない。だけれども、その白鳥の羽のさざ波はさあっと広がっていく。それぐらい見えないけれども、確実に何かが伝播していくという社会教育の本質を表現するために、彼はそういう表現の仕方をしています。

だから、皆さんがおっしゃるように、社会教育がつかみにくいというのは確かだと思います。実態としては非常に見えにくい活動で、だけれども、そこには確実に何かが伝播していくような、さざ波のように伝わっていくようなものではないかと思います。それは１カ所ではなくて、同時にいろんなところで小さくさざ波が起こって、それが共振し合っていくと、さらにうねりというか、活動している中で実感していくものがより一層強くなっていくと私は思っています。社会教育というのは非常に評価されにくいポジションです。それを誰かに伝えるのが本当に難しい仕事だと思いますが、ぜひこの報告書も生かしていただきたいですし、また来期につなげていただければと思っています。

○委員　せっかくすばらしい報告書ができたので、先ほど言ったように、当然いろんな部署に読んでもらうことはとても大事ですが、一番土台の社会教育主事と社会教育指導員は読み合わせをして、お互いにこの課題と方策をぜひ共有していただきたい。これは最低限必要なことではないかと思います。

なぜこんなことを言うかというと、実は私は１年間、社会教育指導員の経験があります。ですから、どういう立場で、どういうものかというのをよくわかっています。社会教育主事は６名、プラスアルファで社会教育指導員も５名、約10名いらっしゃるのでしょうけれども、ぜひこれを読み込んでいただきたいと切にお願いしたいと思います。

○委員　読むだけじゃわからないかもしれないので、機会があれば一緒にセッションができたら、こちらの意図がもっと伝わるのかなと思います。

○議長　そうですね。大きくなくていいので、社会教育指導員、社会教育主事を交えて懇談会、報告会みたいなことをやって、本当に近い距離でお互いにやりとりをするぐらいのことはあってもいいと思います。

最後に事務局から御挨拶を、どうぞよろしくお願いいたします。

○生涯学習部長　社会教育委員の皆様には２年間にわたりまして、本当にありがとうございました。今期は特に社会教育行政についてさまざまな御意見をいただいたと思っています。社会教育主事、社会教育指導員、こういった専門職によるコーディネート機能を充実していくとか、専門職としてのあり方はどうしていくのかということをお話しいただきまして、私たちはもっと頑張っていかなければいけないと感じたところでございます。本日まとめていただいたこの報告書を何とか形にしてみたいと思っています。この報告書は、今日もお話がありましたけれども、庁内の関係所管にはお配りします。庁内横断的に連携して取り組んでいけたらいいと思っております。

最後になりますけれども、改めてこの２年間、皆様に御協力していただいたことに感謝を申し上げまして、事務局からの挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

○議長　ありがとうございました。では、以上をもちまして、第28期社会教育委員の会議を閉会といたします。２年間御協力いただき、まことにありがとうございました。